

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第九十一卷「芸術、文化、言語、文学（三の一）」

日本文学、諸言語文学（一）

和歌（一）、漢詩

編纂、監修 岩崎純一学術研究所 『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第九十一巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、和歌集等を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

旧派歌道・歌学探求の旅

「純星」と「余情」

編纂の開始と日本語訳

和歌スケッチ（書）

管理人の和歌と書

和歌の整理（1）

和歌の整理（2）

和歌の整理が終わってきた

『新純星余情和歌集』

『雪月花 拙唱交響 岩崎純一愚作選』を掲載

『新純星余情和歌集』現代語訳＞平成新詠天徳内裏歌合（二〇

一〇）

『新純星余情和歌集』現代語訳について

『新純星余情和歌集』全解釈を掲載しました

第三編 三十歳～三十九歳

和漢朗詠集 戀 朝鮮語譯

『新純星余情和歌集』のページを更新&人員募集中

共感覚和歌（臨時掲載）

漢詩

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

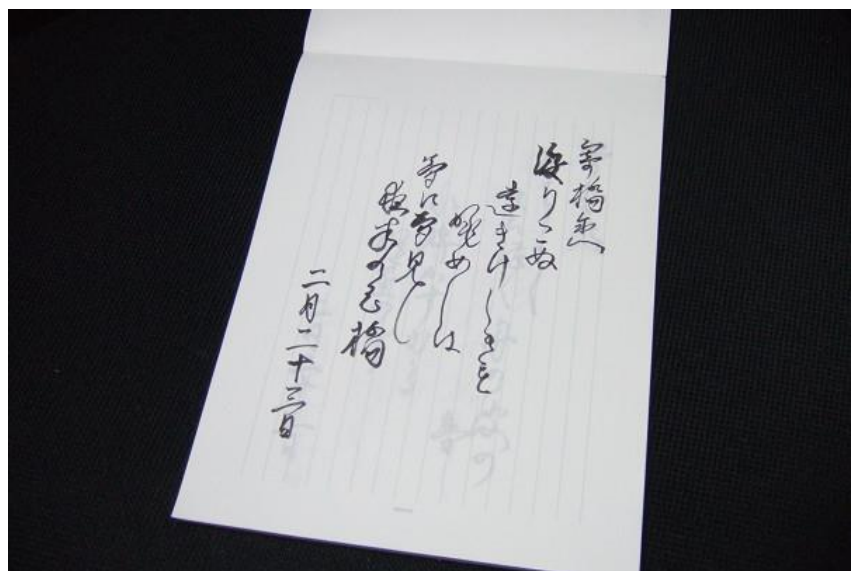
和歌スケッチ（書）

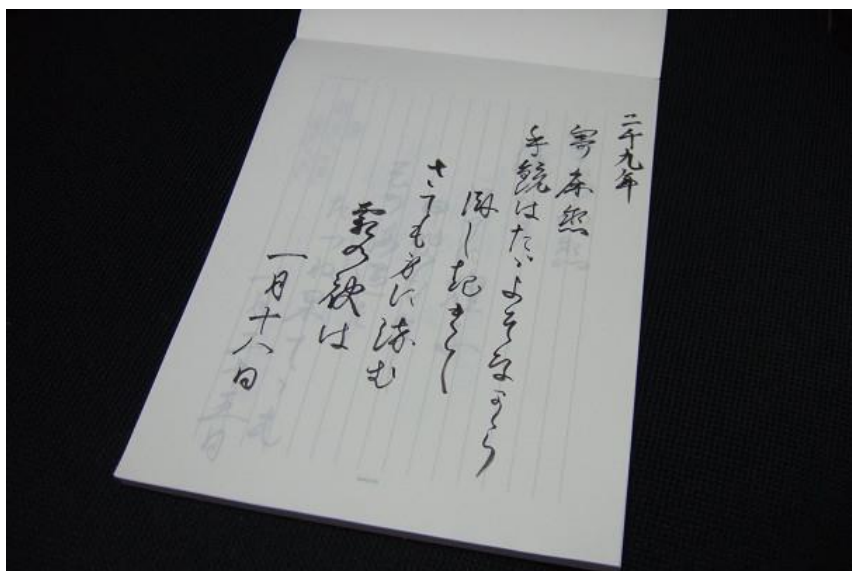
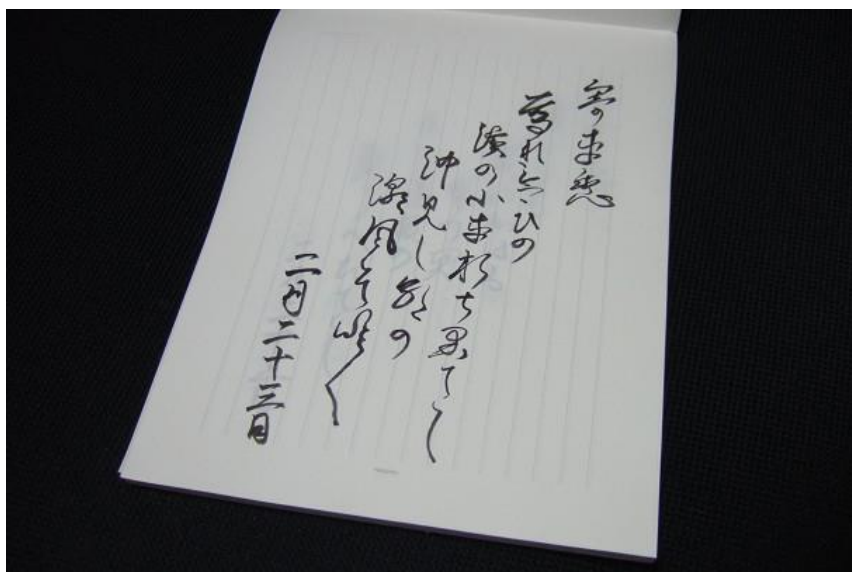
二〇〇八年三月九日 起筆

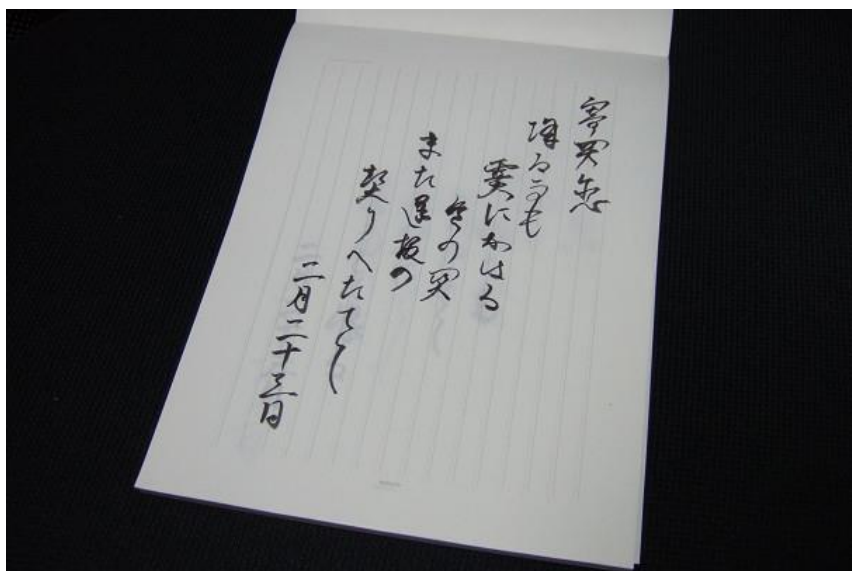
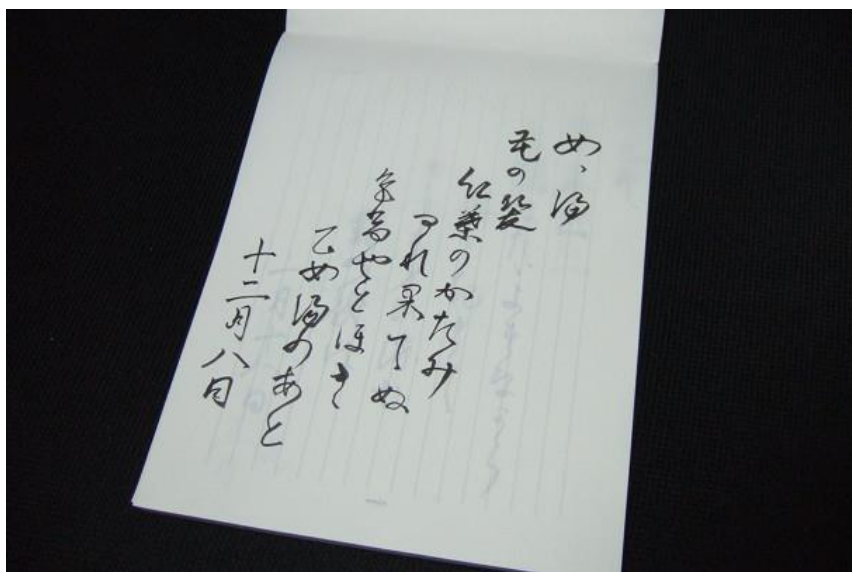
二〇〇八年五月六日 公開

二〇一七年三月十三日 最終更新

■私が和歌を詠んだ時のスケッチ（書）です。歌は『新純星余情和歌集』に収めてあります。

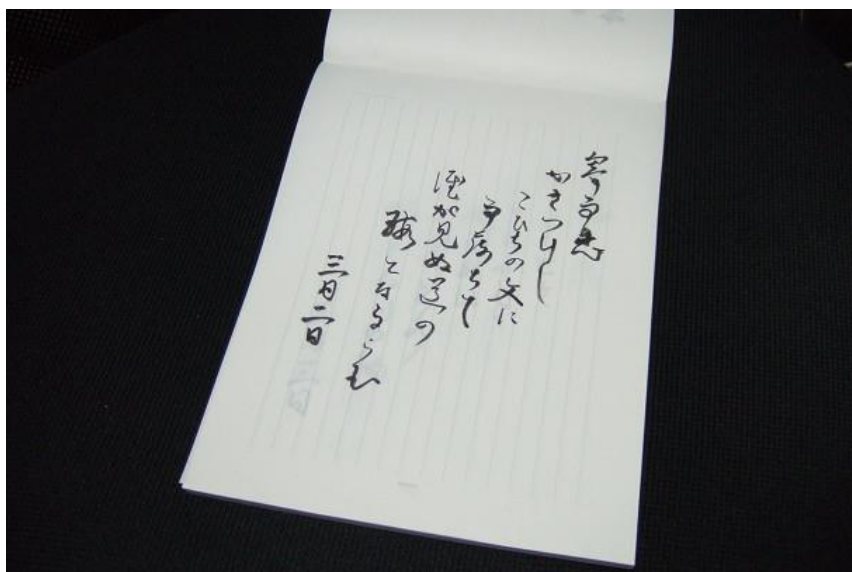






寄るは
焚く来し
夢の跡り言
われゆきし
たよる分は
其のよき縁を
二百二十一日

寄るは恋
を白かりて
智るし後は
海かいつら
ちらぬ川波
二百二十一日

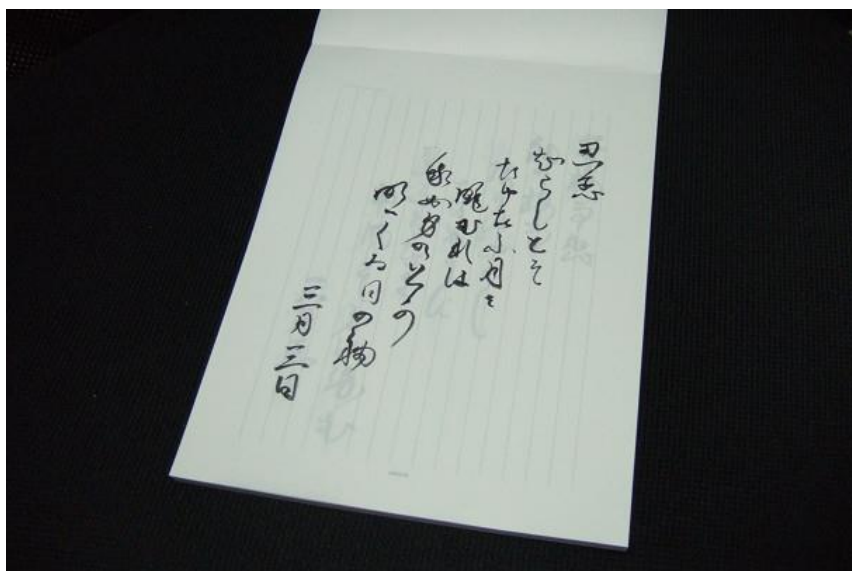


岩崎純一
三月二日

岩崎純一
三月二日

岩崎純一
三月二日

岩崎純一
三月二日



岩崎純一
三月三日

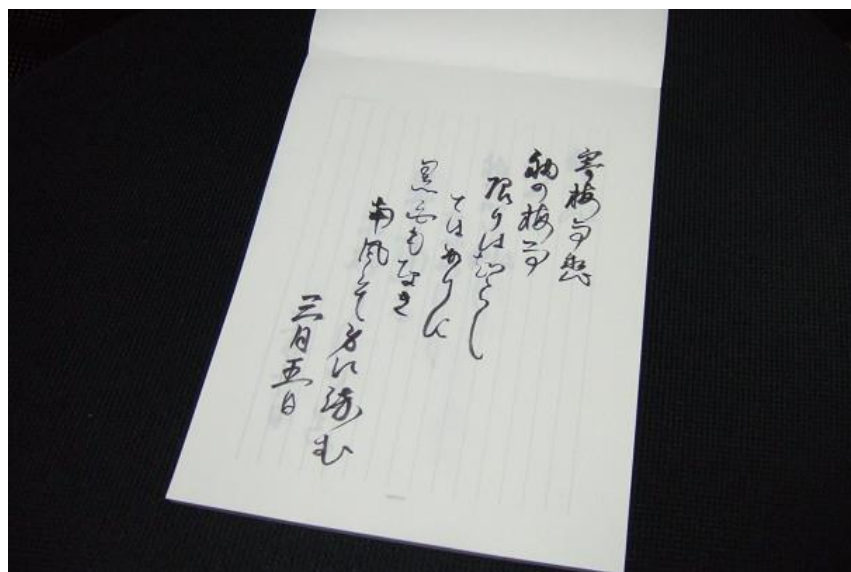
岩崎純一
三月三日

岩崎純一
三月三日

岩崎純一
三月三日

管理人の和歌と書

二〇〇九年四月十九日 起筆、攔筆、公開



画像は前掲に同じ。

私の趣味。和歌・漢詩・漢籍・書・東洋哲学・仏教・日本画・日本庭園・雅楽鑑賞など、日本・東洋趣味の多い私です。でも、西洋の象徴主義絵画や西洋哲学なども好きなんです。普段、全部に親しむのは時間的に無理ですが。

ひとまず、自作和歌と自筆の書を。和歌は、自讃歌と他のアマチュア歌人から評価を得た歌から抜粋。日付は偏っていますか・・・。

和歌の整理（1）

二〇〇九年八月二十七日 起筆、攔筆、公開

最近、自分が今までに詠んだ和歌の整理がかなり進んだ。僕の和歌は、知り合いからは新古今風妖艶美とか漢詩的縹渺美（ひょうびょうびょうび）と言われる。確かに、自分でも藤原定家・藤原良経・塚本邦雄の歌風に近いと思う。ただし時々、難解すぎる、テクニクに凝り過ぎ、とも言われる。もう少し素直に詠むには何年もかかる気がする。

ちなみに、有名歌人の教え子さんや、日本語の在野研究家、神職関

係の方などとは和歌のやり取り（題詠など）がありますが、特定の歌会やサークルに属してはいません。和歌や書などに関することは、古本屋などを巡って身に付けました。自分で題を付けるときも、勅撰集などに倣って漢詩・漢文で付けています。和歌には、人生にかかわるほどのこだわりがあるので、理想の世界を目指したいです。三十歳になったら、和歌か漢文で日記でも書く予定です。

ちなみに、以下の白居易の「夕殿螢飛思悄然」の詩に、定家は、「暮ると明くと胸のあたりも燃え盡きぬ夕の螢夜半のともしび」と詠んでいる。この天才的境地に入るには、まだ多くの時間がかかる気かしている。まだ自分では詠めないような歌であるのに、いざ見せられると自分の歌よりも優れていることが確実に自分には分かる、このじれったさ。

爲君薰衣裳 君聞蘭麝不馨香 爲君事容飴 君見金翠無顔色
今はたゞ作りて薰けど来ぬ人の心のよその化粧袖の香

更闌夜靜 長門閉而不開 月冷風秋 團扇杳而共絶
ひとりぬる秋の扇に風更けて月影寒く門に照りつゝ

行宮見月傷心色 夜雨聞猿斷腸聲
眉の月黒髪の雨また見えぬ身を面影は傷め断つとて

春風桃李花開日 秋露梧桐葉落時

花の咲き葉の散るごとの面影や重なる憂さに春秋もなし

夕殿螢飛思悄然 秋燈挑盡未能眠

夕されば螢の影に思ひ出でてまして起き居る秋の燭

南翔北嚮 難付寒温於秋雁 東出西流 亦寄瞻望於緊月

眺めやるそなたの空によしもなし遠き雁が音有明の色

聞得園中花養艶 請君許折一枝春

選ばせよ瓣瓣芳しき一枝を奥の奥なる春の花園

寒閨獨臥無夫聳 不妨蕭郎枉馬蹄

渡り来し傍の足音を聞きながら知らずはあらし宇治の橋姫

貞女峽空唯月色 窈娘堤舊獨波聲

貝籠めに包みし文を形見とて訪ひし濱びの玉響の砂

不逢戀

我が身にはならずよそにぞ初戀やつきなばつきね入相の鐘

曉庭初雪

あかつきの風はもゆらに耀ひて白き玉散る庭の初雪

草露映月

草の上につらぬきとめぬ白玉や緑に落ゆる露の月影

雨中夕花

細き音も聞こえぬ雨の夕暮に霞を染めてにほふ花笠

寄雪戀

あはれ冬はみそかにあけし窗のうちによべの枕をしたふ白雪

寄月戀

白露に待つ夜のなかの月過ぎて氷にうつる遠き色人

寄花戀

我が戀は春の梢の霞みつゝ散りても花の風の山越え

寄雪戀

昨夜の髪今朝の下帯いかにして春よりのちの雪にかこたん

寄舟戀

ひとりきくまた漕ぐ舟の波の音水棹かすむる明星の空

和歌の整理（2）

二〇〇九年八月二十八日 起筆、攔筆、公開

引き続き、適当に抜粹。

あいいうえお順にすべきか、いろは順にすべきか、勅撰集に倣って春夏秋冬恋雑順にすべきか、詠んだ年月日順にすべきか、迷ったけれども、とりあえず「Excel」で整理すれば簡単に並べ替えできるので、そうしよう。しかし、正字体・正仮名遣い・断絶した漢字の読み方などは、「Excel」では対応不可能だから、やはり和歌は、自筆草稿が一番信用できるのだな。

行路深雪

雪おもる路のゆくてを砕くとも白き果たてに空は閉ぢつゝ

連夜見月

眺めずはあはれになびく袖なきを幾夜の露ににほふ月影

暮春惜花

こきませし春のにほひを脱ぎそめてひとへに惜しな花の袂は

湖上雪

うちはらふ袂のほかは色冷えてひとつにはほふ雪の湖

江上月

空あふぐ巖の色をかすめつゝ入江の底を磨く月影

河上花

岸かをるこなたかなたの梢より河面に花は移りかひつゝ

神祇

天照らす現の帝うつるとも動かぬ杜に竝ぶ御陵

遠離一切顛倒夢想

心にはいかなる秋の風吹くも葛の裡葉を返すべからず

寄柳戀

花籠めにかれにしあとに残る身は雨おきまよふ青柳の絲

寄野戀

色うつるうづら衣に露落ちて心は上の深草の空

別戀

人と見しことだに残る月の夜の袂さびしきときの木枯らし

夕立

夕立の戀ひそめし身の雲間なくやむにやまれぬ上の空かな

秋風

つれなくて身に染む野邊の深草に水莖のみぞかよふ秋風

鶉

草深き野邊の秋風はらひあへず露の底にぞ鶉鳴くなる

雁

渡り來る聲に重ねて待たれつる今日か明日かの雁の玉章

鶴

白妙の初雪降りてつもらぬによそにぞとけぬ鶴の毛衣

鴨

寒き夜の浮き寝の鴨の羽の色に散り敷く月の影の玉水

落花

面影は重ねじとでもなほも惜し花の別れは袖のひとへに

夏海

大風に夏のわたつみ波立てていかづち遠くあふぐ濱松

清水

涼しさをとへど岩根は日盛りにさりととも底の水の白玉

夕暮

忘れぬ袖の別れの色の道下葉こがるる秋の夕暮

霜

さ筵やうつろふ色の袖の霜いく夜も知らぬ月の光に

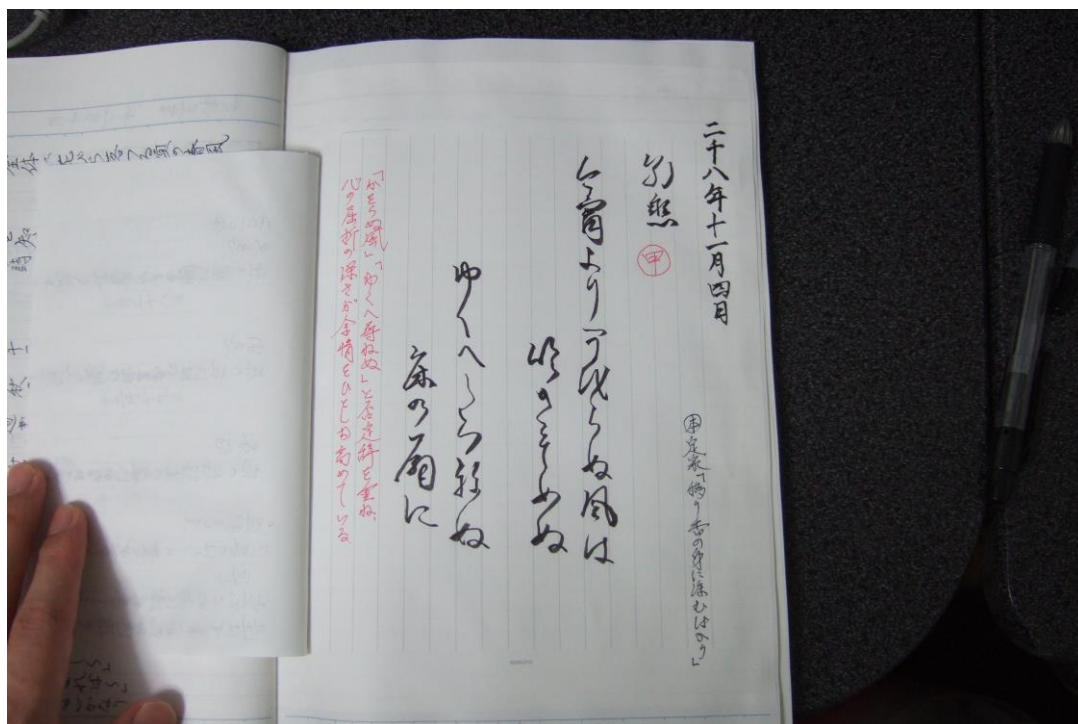
枝垂櫻

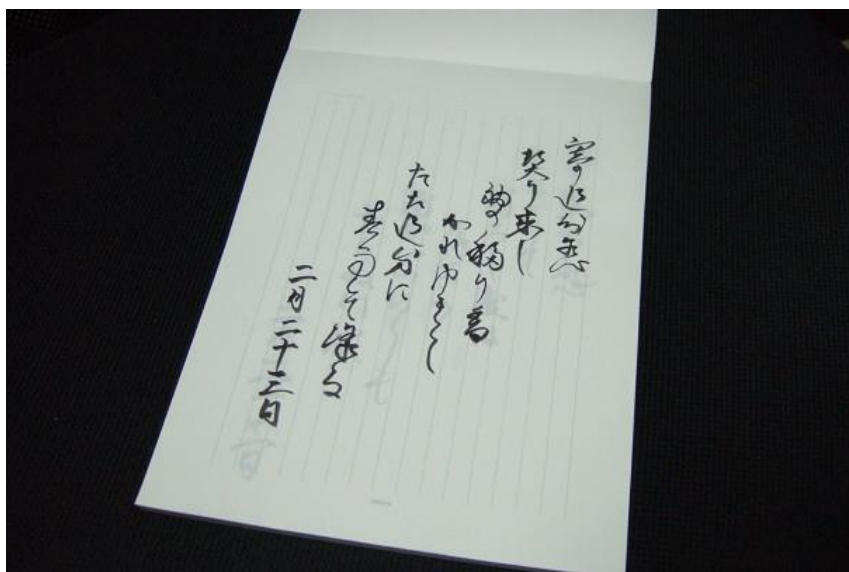
春はたゞ六義の心定まらず巡り咲く園のしだれ櫻に

和歌の整理が終わってきた

二〇〇九年九月三日 起筆、擲筆、公開

和歌の入力がほぼ終わり。それにしても、僕はノートの使い方がおかしいかも……。以下には便箋もありますが。要するに、思い付いたら目下そばにある紙に書く癖がある、ということですね……。何でも口に入れる赤ん坊と同じことかもしれない。





『新純星余情和歌集』

二〇二一年一月六日 起筆

二〇二一年四月二十四日 公開
二〇二三年二月五日 最終更新

全て別添資料として収録した。別添資料を見よ。

『雪月花 拙唱交響 岩崎純一愚作選』

二〇二一年二月八日 起筆
二〇二一年十二月二十七日 臨時公開
二〇二一年十二月三十一日 公開
二〇一六年九月十一日 最終更新

別添資料を見よ。

『雪月花 拙唱交響 岩崎純一愚作選』を掲載

二〇二一年十二月二十七日 起筆、摺筆、公開
(二〇一八年七月三十日追記…リンク先の旧サイトのページは『全集』に収録。)

二十代最後の年越しの記念に、というわけでもないが、ふと思いつき立ち、『雪月花 拙唱交響 岩崎純一愚作選』というものを載せておいた。

http://iwasakijunichi.net/ronbun_ippan/setsugekka.pdf (PDFファイル)

これは、『雪月花 絶唱交響 良経・家隆・定家名作選』（塚本邦雄、一九七六年、読売新聞社）という本をもじった試み。この本は、九条良経・藤原家隆・藤原定家の名作和歌（各五十首）を塚本邦雄が撰し、それらから着想した塚本氏の解説・現代詩なども添えられたもので、この三歌人が私と同じく二十代で詠んだ歌も満遍なく入っている。

そこで私は、それぞれの歌と同じコンセプト・情景・歌語などを元にして歌を詠んだ。全部で同じく百五十首ある。絵画的・視覚的にも面白いものになったと思う。自分の和歌関連プロフィールも、わざとらしいが書いておいた。

むろん、「拙」や「愚」というのは、へりくだりの言葉で、「拙唱（せつしょう）」と付けたのは、「絶唱（せつしょう）」とのいわば掛詞としての遊び心からである。いつか、この百五十首に限らず、私の全ての和歌について、現代語訳や、用いてある和歌の技巧・技術の解説なども入力できればと思っている。

それはともかく、原著で何よりも面白いのは、良経が「雪」、家隆が「月」、定家が「花」というように、それ自体が象徴的に「四季」や「自然」という意味になる風物である。「雪月花」に喩えられている点である。私が自分の和歌人生において最も著しく共感を持って

私淑してきた三歌人が、たとえ今や紙の上でのみの面会であるにせよ、「雪月花」として再生した光景に、長年心躍ってきたものだ。

（ちなみに、塚本邦雄が書いた本で、この三人の和歌に一般の和歌初心者や和歌愛好家が触れる場合に最適なものを挙げておくと、『定家百首 雪月花（抄）』や『王朝百首』があると思う。いずれも講談社文芸文庫。）

「雪月花」とは、元は白居易の詩『寄殷協律』の一句「雪月花時最憶君（雪月花の時最も君を憶ふ）」に由来し、日本人はわざわざこの「雪月花」を自然美の象徴として特別に愛好するようになり、主に「月雪花」と書くようになった。そのために、「雪月花」と書いた場合は「せつげつか」と音で読み、「月雪花」と書いた場合は「つきゆきはな」と訓で読むのが、古典では通例である。

それにしても、三人の実人生を考えれば、私としては、良経は「花」、家隆は「雪」、定家は「月」であったかもしれないと思う。

良経は、高官位を約束された藤原氏長者の血統にして学才早熟、和歌・漢詩文を良くし、十歳近く年長の家来である家隆と定家をも感心させ、自身が仮名序を執筆した『新古今集』の完成を見ながら、直後に頓死した。新たに建てた自邸にて曲水の宴を催す予定ながら、熊野本宮の炎上によって延期となり、その間に何の前兆もなく世を去った。

まさに、春の夜にあっけなく散る「花」のようだと思う。家隆も定家も、良経の死に際して己の主君を「花」に見立てた哀傷歌を詠み合っている。

昨日までかげとたのみし桜花ひとよの夢の春の山風（家隆）
悲しさの昨日の夢にくらぶればうつろふ花も今日の山風（定家）

さすがは家隆・定家と言うべきか、まるで自分のもとを去った男を嘆く女が詠んだ歌にも取れるように詠んである細工と技巧は秀逸で、恋歌仕立てとなっているのであるが、見方を変えれば、二人にとって良経の死は「自分を女に喩えて詠みたい」ほどの衝撃だったのだろう。

家隆は、この三人の中では最年長で、良経の藤原主家とはもはや遠縁にすぎず、和歌も晩成型だが、若き「治天の君」である後鳥羽院に良経が「家隆を師とするがよい」と推挙して以来、当時の歌壇において、俊成・定家親子を中心とする御子左流歌道と並び称されるに至った。定家ほどの幻想美愛好家・厭世家とは見えず、優しくおおらかな男だったようだが、地上にあってもなお、常にどこか冷徹な観察眼を持って和歌と自己の厳格な研鑽に励んだ。

やはり、なかなか溶け消えず残る「雪」のような男だと思う。

定家は、大歌人俊成を父に持ち、父の「幽玄体」を発展させ、余情美・妖艶美を基調とする「有心体」和歌を詠み続けた。「定家は神経症・生真面目気質で、それが現実と夢との境界を消してしまう象徴美表現を生んだ」と分析している定家研究家は少なくない。

定家は十九歳にして、日記『明月記』において、白居易の詩文「紅旗破賊非吾事」を振り、「紅旗征戎吾が事に非ず」、すなわち「朝廷・

天皇の軍旗（紅旗）も東国・鎌倉武士の反乱（征戎）も自分の知ったことか」と言い切り、いわば血生臭い世界とは無縁の芸術至上の人生を宣言した。あるいは、このワンフレーズは、かつては麗しい歌壇を共にしながら、鎌倉幕府打倒のために承久の乱を起こして暴走した後鳥羽院を、定家が見限って、失望のもとに後年・晩年に加筆したものとも言われる。

いずれにせよ、定家の一生涯はそういうもの、喩えるなら、自らを天遠くより地上に照る「月」であると宣言したような人生であった。

そして今日、私の歌風が、古典伝統和歌に詳しい仲間の皆様から何と言われているかと言えば、数年前、まず最初に「定家流である」と言われたのであった。考えてみれば、花も雪も散り消えるものだが、月はそこにあつて満ち欠けを繰り返すだけのものである。ならば月でよいだろうと納得したものであった。

それに私は、まず十七歳でニーチェを読み、ニーチェのように生きる決意したものの、頭の片隅では、日記に「紅旗征戎吾が事に非ず」と綴った、自分と同じ東洋・日本の男に憧れていた。この言葉は、自らの人生からの政治色の排除と芸術至上主義宣言の意味以上に、「吾が事」としての日本の実存の宣言であると私には思えた。そのように定家を解釈し、定家に私淑してきた人間が、定家の歌風であると人から言われて嬉しくないはずはない。

しかし、私の歌風について、「いや、家隆流である」、「いや、良経流である」とおっしゃる方もいらつしやる。ともかく、私の歌風・

歌論・詠みぶりは、ちょうどこの『雪月花』に挙げられた三歌人に近似するものと言われてきた。

などと身勝手な私見を書いたが、塚本邦雄はこれら三人を先述の通りに「雪」「月」「花」としている。むろん、それで全く構わない。

誰がどれに当たるかは、あまり重要ではないだろう。ライバルながらも、互いに尊敬し合った同時代の三人が、まとめて「雪月花」に喩えられたこと自体の感銘のほうが、ずっと深いように思われる。どんな男も、いつかは自然に帰るしかないのである。

実際には、この三歌人の歌風、もっと言うと、和歌に対する没頭姿勢、和歌という言葉のパズルに対する命の賭け方は、大きく違わないと見るのがよいのではないか。三人全員がそれぞれに、「雪月花」という存在なのだろう。

いずれにせよ、私にとっては、挙げられた三人の各五十首は、感涙なしに最後まで鑑賞しきることの不可能な一級品であり続けた。

その横に、およそ八百年後に詠んだ愚作を散りばめてみたわけだから、出来ばえの差はいかんともしがたいものがあると恥じるばかりだ。しかも、八百年後の若者の手によって勝手に「仮想版 曲水の宴」を催されて、さぞかし良縁は嫌な思いだろうと察するが、私は心の内で、これまた身勝手に宴の開催の許可を得たものである。

『新純星余情和歌集』現代語訳＞平成新詠天徳内裏歌合（二〇一〇）

二〇一二年二月十五日 起筆、摺筆、公開



■私の詠んだ和歌（サイトに掲載）の通釈・語釈の試みです。私自身による解説も他の歌人様による解説もあります。リクエストがあった順に載せ、サイトにも載せていきます。

今回は、二〇一〇年に詠んだ歌からです。夏の題も多いので、しばし歌を鑑賞されて、最近の寒い毎日を忘れていただければ幸いです。

●霞

さびしさは秋の枕に同じかな春や霞の夕暮れの果て
（さびしさは あきのまくらに おなじかな はるやかすみの ゆ
ふぐれのはて）

【通釈】

その寂しさは、枕に寝て感じる秋の季節に同じものだ。果てなく霞んだ春の夕暮れは。

●鶯

うぐひすは心の声に聞こえつつまだ梅が枝に影もとまらず
（うぐひすは こころのこゑに きこえつつ まだうめがえにか
げもとまらず）

【通釈】

鳴き声は我が心にも聞こえて、まだ現実の梅の枝に鶯はとまら

ず、その姿は目にもとまらない。

【語釈】

◇掛詞 「枝に」とまらず×「目」に」とまらず「

●鶯

声はなほ我がふみまよふ霜ぞなく今日うぐひすの春と思へど
（こゑはなほ わがふみまよふ しもぞなく けふうぐひすの
はるとおもへど）

【通釈】

今なお鳴っている音と言え、自分が踏み歩いている霜が碎ける音のみだ。今日から鶯の鳴く春だと思ったのに。

●柳

柳原いと細き夜のしだれ糸葉を縫ふ雨の音ぞ重なる
（やなぎはら いとはそきよの しだれいと はをぬふあめの お
とぞかさなる）

【通釈】

しだれ柳の野原。実に細い柳の葉に、夜のしだれ糸である雨の音

が重なり、雨が葉どうしを重ねて縫うようだ。

【語釈】

◇掛詞 「いと×糸」

◇縁語 「柳、しだれ、葉」「細き、糸、縫ふ」

●桜

白妙のたつけしきより桜花霞の衣の裏の山裾

(しろたへの たつけしきより さくらばな かすみのきぬの うらのやますそ)

【通釈】

春の白い霞が立ったすぐそばから、その霞という着物の裏側に隠れた、山のふもとの桜。

【語釈】

◇掛詞 「立つ×裁つ」

◇縁語 「白妙、裁つ、衣、裏、裾」「立つ、霞、山」

◇枕詞 「白妙の↓霞、衣」

●款冬

春風のひとへに過ぐるかをりよりやへに花咲く山吹の色

(はるかぜのひとへにすぐるかをりよりやへにはなさくやまぶきのいろ)

【通釈】

春風がひたすら薄く過ぎてゆく香りよりもっと、何重にも濃く見える山吹の黄色。

【語釈】

◇掛詞 「偏に×一重に」

◇対句 「一重に、過ぐる、かをり〓八重に、咲く、いろ」

●藤

紫の色より暗く空更けて夜にも見ゆる屋戸の藤波

(むらさきのいろよりくらくそらふけてよるにもみゆるやどのふぢなみ)

【通釈】

紫の色よりも暗く空は更けたはずが、その黒き夜にも見えるのは、庭先に植えてある紫の藤の花。

【語釈】

◇参照 「恋しけば形見にせむと我が屋戸に植ゑし藤波今咲きにけり」（万葉 山部赤人）

●卯花

桜色の弥生の月のなごりかは白みは果てず咲ける卯の花

（さくらいろの やよひのつきの なごりかは しらみははてず さけるうのはな）

【通釈】

桜の咲き誇った弥生三月のなごりか。真つ白にはなり果てず、桜色を帯びて咲く卯の花。

【語釈】

◇「弥生」↓「卯月」、「桜」↓「卯の花」

●郭公

風薫りあつさは遠き静けさに夏を定むる山ほととぎす

（かぜかをり あつさはとほき しづけさに なつをさだむる やまほととぎす）

【通釈】

夏の風が薫っても暑さはまだ遠い静けさのようであったが、いよいよそこに夏を決定付ける、山のととぎすの一声。

●夏草

刈るからに道の行く手にあらはれてかき分けがたく繁る夏草

（かるからに みちのゆくてに あらはれて かきわけがたく しげるなつくさ）

【通釈】

刈るたびに道の行く手に現れては、かき分けて進むのがうつつとうしく繁る夏草。

●恋

桜花しだれ柳を重ねても袖の契りは次の折の名

（さくらばな しだれやなぎを かさねても そでのちぎりは つぎのをりのな）

【通釈】

春の桜や夏のしだれ柳を重ね重ね眺め、それらをあしらった着物を重ね着しても、袖の約束は次の季節の名前でございませう。つまり、あなたの心は私に「秋（飽き）」が来たのでしょね。

【語釈】

◇掛詞 「重ね×襲（かさね）」「次の折の名（秋）×（飽き）」

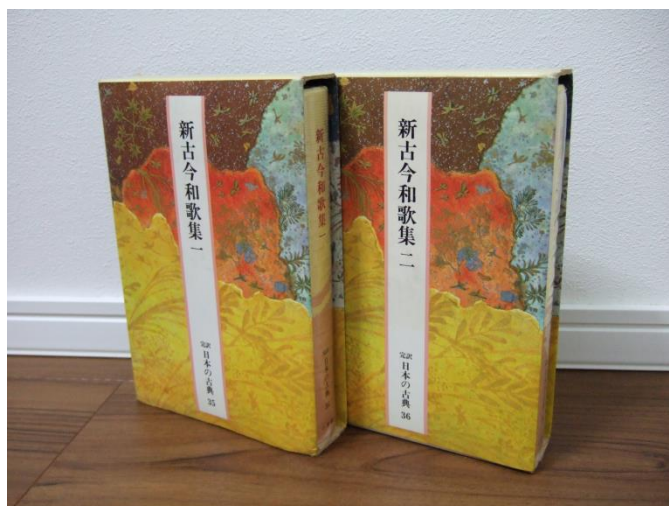
◇縁語 「重ね、襲、袖、折り」

■本記事の各歌は、『天徳内裏歌合』（九六〇）にならって詠んだもので、まとめて『平成新詠天徳内裏歌合』（へいせいしんえいてんとくだいりうたあわせ）とした。九六〇年当時の題も「春」と「夏」の動植物・風物および「恋」で、衣装の色でチーム分けし、左方は赤基調の春の桜重ね、右方は青基調の夏の柳重ねとするなど、視覚的にもこだわったようである。

『新純星余情和歌集』現代語訳について

二〇一二年二月十六日 起筆、擱筆、公開

（二〇一八年七月三十日追記…リンク先の旧サイトのページは『全集』に収録。）



■私が公開している自分の和歌（『新純星余情和歌集』）の現代語訳と解説に、古典にお詳しいブログ読者様や私の和歌仲間が協力して下さるということで、昨日と今日（以下）、試しに載せてみました。今のブログの雰囲気（共感覚・人間論・社会論・精神論などが中心）を考えると、訳をブログにコピーして載せるのはやめるかもしれません。以下の和歌ページには今後も載せていく予定です。

<http://iwasakijunichi.net/waka/>

■私の夢としては、「私の和歌を紹介する」と言うよりは、「私の和歌と、皆様による現代語訳とが、どちらも合わせて美しい芸術・純文学・詩編・短編小説の世界になっている」という状態にしたい気持ちもあり、基本的な間違いがない限り、どんな文体の現代語訳でも結構で、和歌の知識や技巧について間違ったものがあつたときだけ、私が訂正させていただいています。

特に、恋の歌などは、私も人間ですから、自分で現代語訳すると、無意識に格好つける可能性もありますので、別の方が翻訳したほうがよいとも感じます。

■ところで私は、大学時代に、東京は神保町の古本街を血眼で探し回った結果、多くの古典和歌集の原典コピー本を（図書ではなく自分の蔵書として）持っているのですが、逆に私が持っていない『雅言集覧』や『俚言集覧』などの江戸時代の古典語辞書を持っていらつしやる方が協力して下さるとのこと、ありがたい限りですし、解説にも間違いがなくなるでしょう。

私が持っているのは、『新撰字鏡』、『和名類聚抄』、『類聚名義抄』、『色葉字類抄』などです。

■最近、私も和歌の現代語訳全般に興味があります。右上の画像のような、元歌と訳の両方が載った和歌集は、和歌の初心者でも読みやすく、古典の世界に自然に入りやすい気がします。

■今日は、例として、『大江戸往来恋歌合』を載せておきます。

●寄橋恋

渡りこぬ遠きけしきを眺めしは夢に夢見し夜半の玉橋
（わたりこぬ とほきけしきを ながめしは ゆめにゆめみしよ
はのたまはし）

【通釈】

恋人がこちら側まで渡って来ない景色を眺めて終わったその場所は、それでも渡って来ることを夢見た夜中の美しい橋でした。

【語釈】

◇本歌取 「久方の天の川に上つ瀬に玉橋渡し・・・」（『万葉』）

●寄舟恋

ひとりきくまた漕ぐ舟の波の音水棹かすむる明星の空
（ひとりきく またこぐふねの なみのおと みさをかすむる あ
かぼしのそら）

【通釈】

私は独り、舟の上で聞く。独りで漕ぎ続ける波の音を。舟の櫂を奪

い取って漂流させ、私の操をかすめ盗るのは、夜明けの金星の空。

【語釈】

◇掛詞 「水棹×操」

◇参照 「あるが上に又脱ぎ懸くる唐衣操もいかがつもりあふべき」
（大江匡衡）

●寄車恋

暮れ合ひの浜の小車朽ち果てて沖見し朝の潮風ぞ吹く
（くれあひのはまのをぐるま くちはてて おきみしあさのし
ほかせぞふく）

【通釈】

夕暮れ時、二人が最期に乗り捨てた浜辺の車は朽ち果てて、入水前に共に沖を見た朝と同じ潮風が吹く。

【語釈】

◇参照 「小車の簾動かす風ぞ涼しき」『風雅』

●寄閑恋

降る雨も霰にかはる冬の閑また逢坂の契りへだてて

（ふるあめも みぞれにかはる ふゆのせき またあふさかのち
ぎりへだてて）

【通釈】

降る雨も冬の霰に変わりゆく逢坂の閑。再びあなたと逢うとの約束を隔てて。

【語釈】

◇歌枕 「逢坂の閑」

◇掛詞 「また逢ふ×逢坂」

◇縁語 「閑、逢坂、へだつ」

◇参照 「これやこの行くも帰るも別れつつ知るも知らぬも相坂の閑」（蟬丸『後撰』）

●寄追分恋

契り来し袖の移り香かれゆきてただ追分に春雨ぞ降る
（ちぎりこし そでのうつりが かれゆきて ただおひわけに
はるさめぞふる）

【通釈】

約束し合ってきた袖の移り香は涸れ、二人は離れ離れになり、ただ街道の別れ際に春雨が降っている。

●寄落合恋

今日かけて待ちし涙は落合の誰がいつはりも知らぬ川波

（けふかけて まちしなみだは おちあひの たがいつはりも し
らぬかはなみ）

【通釈】

今日まで心にかけて、あなたと落ち合うはずの場所で待ってきたのに、それも叶わないで私の涙は落ちる。その涙が誰のついた嘘のせいかも知らないのでしょうか、二つの川の落ち合いに立つ波は。

【語釈】

◇掛詞 「落ち×落合」

●寄宿場恋

恋あまた行き交ふ宿に見る空もかへぬならひのかへるさの月

（こひあまた ゆきかふやどに みるそらも かへぬならひの か
へるさのつき）

【通釈】

恋の叶う模様が多く行き交う宿場町の宿の中から見る空にも、私に

とっては、「あなたの心は他の女性に向いていて、あなたはちやうど今その帰り道にある」ことと取り換えることはできないという、古歌にある通りの習わしの、明け方の月が出ています。

【語釈】

◇本歌取 「帰るさのものとや人のながむらん待つ夜ながらの有明の月」（定家）

『新純星余情和歌集』全解釈を掲載しました

二〇一二年四月二日 起筆、攔筆、公開

（二〇一八年七月三十日追記…リンク先の旧サイトのページは『全集』に収録。）

先月のブログにも書きました私の和歌の現代語訳（翻訳）についてですが、何人かの方々のご協力で、現在掲載している和歌の全解釈が終了しましたので、サイトに掲載しました。全部で一一〇九首（四月一日時点）あります。

「通釈」という欄が現代語訳で、「語釈」という欄が古典語解説になります。自分で翻訳・解説した歌も多いですが、全体としては「自分の和歌を翻訳・解説して下さる方々の作業の監修」というのが近いかと思っています。

それにしても、あつと言う間に終了しました。驚きました。協力して下さった方々に改めて厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

もちろん今後とも歌は増えますので、それも反映していきますが、鑑賞のためや、和歌・古典語の勉強にお使いになるためのプリントアウトなどは、いつでもご自由です。

横に設けた「評」と「派生歌」の欄については、評と派生歌のある歌のみになりますが、こちらも随時掲載していきます。現時点で特にこの和歌集全解釈にご参加下さっていない方からの歌評や返歌なども、随時受け付けています。（メールなどでどうぞ。）

『新純星余情和歌集』全解釈

<http://iwasakijunichi.net/waka/>

第三編 三十歳〜三十九歳

和漢朗詠集 戀 朝鮮語譯

二〇一二年六月十八日 起筆

二〇一二年七月二十二日 最終更新

別添資料を見よ。

『新純星余情和歌集』のページを更新&人員募集中

二〇一三年一月五日 起筆、擱筆、公開

（二〇一八年七月三十日追記…リンク先の旧サイトのページは『全集』に収録。）

新年早々、サイトの『新純星余情和歌集』のページをいくつか更新しました。

<http://iwasakijunichi.net/waka/>

まず、表紙に、今後十年ほどの計画をおおまかに書きました。

それから、「神祇の部」のあとに、当和歌集の「重要語総覧」を載せました。これは、すでに掲載してある全和歌に出現する重要語を五十音順に書き出したリストで、枕詞のリストや歌枕・名所名跡のリストもあります。

このリストは、元々は私の和歌の現代語訳者の方々が何気なく書き出して下さっていたものを、正式にコンテンツ化したものです。これを用いると、例えば「建築物」の項目の「ひ」の「火・灯・燈」を見ると、私が自分の和歌の中で、この「ひ（火・灯・燈）」と、「ひ」の派生語である「漁り火、ともし火、埋み火、篝火（かがり

び)、蚊遣火(かやりび)、炭火、螢火」の語を使用したことが分かります。

また、表紙に「真名序」「仮名序」「訓民正音序」とありますが、説明します。

私のこの和歌集は、私の個人的な格調・風流趣味もあって、いわゆる勅撰和歌集と、藤原良経・藤原家隆・藤原定家らの私家集に倣った部立てにしていますが、本来、勅撰和歌集のおよそ半数には序文が付いており、この序文は主に、全てが漢文で書かれた「真名序(真正の文字による序、の意)」と、全てが大和言葉で書かれた「仮名序(仮の文字による序、の意)」で構成されています。当時の教養人が、分担して書いています。(残る半分は、真名序と仮名序のどちらもない歌集か、真名序だけがない歌集です。)

和歌に限らず、漢字(真名)と仮名というのは、元よりそういう意味で、この両方に教養がなければ一流の歌人・文化人とは言えないという風潮でした。

ここで面白いのが、和歌文化はその後現在まで続くにしても、応仁の乱などの時勢もあって、勅撰和歌集自体は、後花園天皇下命、飛鳥井雅世撰の『新統古今和歌集』を最後にとだえ、これが一四三九年のことだったという点です。

李氏朝鮮の世宗が「訓民正音」(現在のハングルの前身)を公布したのが一四四六年と言われていますから、実に朝鮮半島に固有の文字が誕生するまでに、日本は自国語を真名・仮名の両方で記録し、全ての勅撰和歌集の編纂を終えていたこととなります。すなわち、

勅撰和歌集を編んだ日本人(天皇・貴族・武家など)のほとんどは、訓民正音を知らずに世を去っています。

それ以前の朝鮮語は、口訣(こうけつ・くけつ)や吏読(りとう)や郷札(きょうさつ)でしか記録されていなかったため、これが朝鮮の郷歌(いわば日本の和歌に該当)や古代朝鮮語の研究を困難にしまいました。日本において外来の漢字音を民族固有のヤマトコトバに適用した同様の方法(「万葉仮名」や「漢文訓読」)での記録法の成立と比べると、訓民正音の成立とはおよそ七百年の差があります。

(朝鮮語が漢字で記録しにくく、ヤマトコトバが漢字で記録しやすいの、文化の優劣の問題では毛頭なく、音韻体系・統語論的現象であるので、言語学的に説明可能なものであると私は考えます。)

しかし、格調高い口訣・吏読・郷札の簡易化や、訓民正音の大衆化が遅れたことが、むしろ日本の宮廷人における、古代朝鮮語を公用語とした百済との良好な関係以来の「口訣・吏読・郷札の漢文的格調・威風」への崇敬の長期化と直結しており、もし引き続き二十番目以降の勅撰集が編まれていたならば、口訣・吏読・郷札か、あるいはハングルによる序文が日本の勅撰集に付かなかった理由はないと考えられます。

いずれにせよ、二十一世紀を生きる一日本人の私が、漢語・日本語・朝鮮語の三つの言語ないし文字体系(真名・仮名・ハングル)を用いて私歌集に序を設ける試みは、芸術としても歴史としても面白いものに違いなく、いつかは執筆したいと考えています。

そのような試みの一環として、一部の私の和歌が訳者によって朝鮮語訳されてもいます。そのうち、英文序も付けるかもしれない。

もつとも、今現在は、日・韓・朝・中の間で色々と領土・領海・拉致問題などを巡る難しい関係がありますが、和歌であれ歌舞伎であれ、芸道・文化というものは、特に昨今の政治・外交上の事情に對して超然としていなければならぬ、というのが私の考えでもありますので、できることは何でもやってみたいと思います。

そのため、もし今の現代語訳者の方々以外で、真名序・仮名序・訓民正音序・英文序のどれかを書きたいという方がいらつしやいましたら、そういう超然さのようなもの、政治・外交的意図とは別のところで一足飛びに湧いてくる自国・異国両方の言語と定型詩への愛着・敬意をお持ちの方である限り、ご連絡下さっても結構です。もちろん、実際にお願ひするのは、今までと同じく面識を持ってからになることをご了承下さい。

そのようなことが、今の予定です。（などと厳しい条件を付けたら、全部自分で書くことになる可能性もありますが。）

共感覚和歌（臨時掲載）

二〇〇八年十二月三日 起筆

二〇〇九年七月十四日 摺筆

別添資料を見よ。

漢詩

編纂中。収録を待たれよ。